

京都市伝統産業活性化推進審議会

第4回京都市伝統産業活性化推進審議会

日時 平成18年10月16日(月) 午後4時00分～5時30分

場所 京都平安会館「嵯峨」の間

出席者(五十音順,敬称略)

池坊 美佳	華道家元池坊青年部代表,京都館館長
岩淵 恵子	京都市小学校長会副会長,京都市立高倉小学校校長
江里 佐代子	截金作家
柿野 欽吾	京都産業大学経済学部教授
高井 節子	京都市立芸術大学美術学部専任講師
高木 壽一	財団法人京都高度技術研究所理事長,京都市国際交流会館館長
谷 裕江	市民委員
西島 安則	京都市産業技術研究所長
星川 茂一	京都市副市長
南 恵美子	株式会社ホテルプリンセス京都取締役支配人
南出 隆久	京都府立大学人間環境学部教授 京ブランド食品認定・品質保証委員会副委員長
三宅 道子	市民委員
森井 保光	京都市産業観光局長
吉澤 健吉	京都新聞社報道局次長兼報道企画室長
若林 卯兵衛	京都伝統工芸協議会会長
若林 靖永	京都大学大学院経営管理研究部教授
渡邊 隆夫	財団法人京都和装産業振興財団理事長,京都商工会議所副会長

欠席者

原 左穂子	株式会社高島屋京都店販売第5部教育担当課長
-------	-----------------------

- 1 開会
- 2 西島会長挨拶
- 3 京都市伝統産業活性化推進計画中間報告に対する市民意見の概要について
(事務局から説明)
- 4 京都市伝統産業活性化推進計画答申案について
(若林靖永計画検討部会部会長から説明)
- 5 委員意見交換

<委員>

・市民意見をみると,市民の方は具体的な内容に関心を持つことがわかる。例えば「活性化の拠点施設等の機能の充実」の項目で「四条京町家をもっと有効に利用できないか」,「繊維技術センターを移転させないでほしい」などは,意見として説得力がある。しかし,計画の理念などについては,市民にとって難しく,意見も出てこない。

・「京都市染織試験場や京都市工業研究所の設置」の部分に、西陣織工業組合が京都市に寄贈したことを明記しておいてほしい。

・「スチューデントシティ・ファイナンスパーク事業」はわかりにくい。

< 委員 >

・小中学生の社会，経済体験学習事業として，括弧の中にスチューデントシティ・ファイナンスパークと入れたらどうか。

< 委員 >

・スローライフという言葉はある程度定着してきたが，京都新聞で「市井の山居」という言葉が出ており，とても良い言葉だと思った。この言葉は伝統産業にとってケバケバしさがなく，感覚的にピンとくる。

< 委員 >

・計画検討部会で数値目標の出荷額 1 % 増加が大きな議論になった。追加説明をしていただいたらどうか。

< 委員 >

・伝統産業界に関するバロメーターとして何が大事かという視点で議論をしてきた。伝統産業の各組合がどんな事業をやっているかではなく，実際に伝統産業を受け入れるマーケットが多少なりとも広がり，ものづくりの各分野で出荷額が増加してこそ，真の意味で伝統産業の活性化に向けて改善したと言える。この視点で数値目標として出荷額をおくこととした。また，特にバブル崩壊後，急速に売上，出荷額の減少を招いており，出荷額を何十パーセントも伸ばすと言える状況ではない。実際には，業界ごとにデータを集め評価し，何とか出荷額ベースで 1 % 増に，つまりプラスに転じるということを実現しようと表明している。計画を策定した時点を重視して，平成 18 年度のデータを基準に平成 23 年はプラスになっているという目標にした。今後も落込みが続くと，なかなか難しい目標だという議論もあったが，計画を策定するからには，平成 18 年度基準でやろうということでもとまった。

・国では近年 3 % 近い経済成長率を実現しており，これが 5 年続くと 10 % を超えるであろうと見通しを立てている。しかもインフレ等も進まない状況の下で，1 % という目標は，控えめな目標だとも言えるが，伝統産業にとってみれば，非常に厳しい目標であると思っている。

< 委員 >

・本当に良い計画が出来つつあると思っている。特に，数値目標を掲げて業界，市民，行政が力を合わせようという計画ができるというのは画期的なことである。

・何かやりましょうという漠然とした目標だけではなかなか力が出せないが，厳しい数値目標を決めて，皆が力を合わせてやろうという基盤がこの計画でできるような気がする。

< 委員 >

・大きな数値目標を設定することで，目指す方向を一つにしていくことが大切なんだと感じた。

・以前韓国に行った時，学校の休みの土曜日にもかかわらず，先生の呼びかけでたくさんの子供が集り，伝統的なお茶の入れ方を教えていた。また，海外に行くと，美術館に子供たちをはじめたくさん入館者がいる。子どもの頃から，文化に触れる，体感することは，重要だと思う。

< 委員 >

・「わたしたちの伝統産業」という副読本を，小学校 4 年生中心に活用しており，非常に

意義深い。

・小中学生の社会，経済体験学習（スチューデントシティ・ファイナンスパーク）事業は，京都市の小学校181校中，本年度実施するのは30校ほどで，総合的な学習の時間に少しずつ体験していくことになっている。また，中学生は生き方探求教育という職場体験で，多種多方面にわたる伝統産業の経験をさせている学校もある。

・お茶の体験については，京都市では，学校のクラブや地域と一緒に取り組む行事でよく実施されている。去年から教育長の発案で茶道研究会もスタートした。

・11月の「歩いて暮らせるまちづくり まちなかを歩く日」に，工房や町家が公開され，町中を歩くイベントがある。染の工房で体験学習もでき，各学校で工夫して地域の伝統産業に目を向ける取組をしている。

<委員>

・伝統産業がたくさんあり，講師の方に容易に来てもらえる地域はいいが，小学校間で格差があるように思う。先生方の話を聞くと，「どうやって講師を探したらいいのかわからない」，「先生が個人的に習ったことを生徒に教えている」など，たいへん苦勞されている。先生方が教えやすいように職人さんの連絡先などがわかるプログラムがあると，全ての小学校で取り組まれるようになると思う。

<会長>

・コンソーシアム京都のプログラムの中にもそういったものがあるが，プランニングまでは行っていない。京都市でも出前の座談会などをしているので，連携できたらいい。

<委員>

・ボランティア登録制度があるが，どれだけその地域の伝統産業の方が登録されているかが課題である。

<委員>

・せっかくチャンスがあっても先生方に意識がない限り前進しない。

<会長>

・同窓会などの催しに伝統産業の講義をしていただけるとありがたい。

<委員>

・28頁に「民間の空き工房の活用等生産拠点を設けることを促進する仕組みの確立」があるが，具体化できるような裏付けがあるのか。若い人や伝統産業に関心のある人たちが新しく仕事を始めようとしても場所がなく，独立することが難しいので，貸し工房みたいなものがあつたらと思っていた。

<事務局>

・一部の業界団体と相談したが，一軒家というとながしいが，一部分であれば十分可能だということだった。これから調査をしていきたいと思っている。

<委員>

・他都市に行った時，製作の作業を見せてもらえて，商品も買えるというお店がたくさん並んでいた。作業風景が外から見学できたら，より親しみがわくのにと思っている。

<委員>

・原産地の表記について，商品販売サイドにとって本当にプラスになるのか疑問に思っている。伝統工芸品はほとんどが分業で作られ，それを京都で販売しているが，消費者は全部が京都で作られているかのように感じているのではないか。何をもって原産地と言っているのか，事業者と消費者の間で大きな認識の違いがあるのではないかと感じている。

< 委員 >

・事業者側も原産地表示を一生懸命行っているが、商品履歴やトレーサビリティなどがわからないという意味か。

< 委員 >

・それが必要であるのかも分からない。

< 委員 >

・事業者の中には、消費者が少しでも京ものに間違っしてほしいと思っているところもある。今しばらく、京都ブランドの捉え方は、事業者もきちんと自覚がいるし、良さを見抜ける賢い消費者づくりも必要である。

< 委員 >

・10月12日に新しく京都館を移転オープンした。たまたまテレビ番組で取り上げていただき、オープン開始には入場制限するほどの賑わいがあり、テレビの力は凄いと感じた。そこでしか買えない京都らしいものをどう提案、提供していくかが、これからの課題である。京都にはたくさん良いものがあり、子供の頃から触れて知ってもらうためにも、親や先生に知ってもらうことは大切である。京都にいながら触れることが無い人、入り口にすら立てない人はたくさんいると思うので、是非そういう入り口作りをして欲しい。

< 委員 >

・京都芸大のデザイン部門や産業技術研究所で様々な取組をしようと少しずつ動き出しているが、それこそ入り口に立った段階だと思っている。デザイン力や新しい商品開発、企画という視点が、いかに京都の伝統産業に浸透するかが大きな課題である。33頁の「技術や技法、デザインや企画力の研修、支援」の中に、技術や技法の継承やデザインや企画力に関する研修に対する支援を行うとあるが、デザインに関する研修、支援は、産業技術研究所や大学がお手伝いできると思う。ただし、研修に対する支援だけではなく、デザインや企画力を充実させる仕組みの構築のところまで踏み込んでいただければ、伝統産業に携わる方が、もっとデザインや企画、マーケティングに対する意識を持つことができるのではないかと思う。

< 会長 >

・最終的には、マーケットをいかに広げるかということまで視野に入れて、デザインをする必要がある。

< 委員 >

・計画が実施される時に、市民の人にわかりやすい簡単なリーフレットを作っていたきたい。

・新聞記事で、全国の人に一番好きな街を聞いたところ、1番が札幌で、京都は5番目だった。記事の締めくくりには、市民は、その土地特有のものづくりをして、人を引きつけるようなものを提供し、情報発信するべきだというようなことも書かれていた。この計画の中でも、そういう目標を掲げているので、是非5年後には京都が1番になれるようなまちづくりができればいい。

< 委員 >

・愛染蔵、たけうちグループの倒産など、京都の伝統産業、特に和装産業については非常に消費者の信頼を損なうような取引等があった。この点を計画に盛り込むかどうかは別にして、例えば事業者の責務として、ものづくりの人は誇りを持って消費者の信頼に応え、流通業者の方は合理的な取引を推進すべきという意味を込めて、事業者の責務のところに消費者の信頼を重視した一文を入れてはどうか。そのことで、今回のような問

題に対して、これから業界が毅然とした態度が取れ、行政としてもサポートしていくことができるのではないかと。

< 委員 >

・同じことを思っていた。この答申案は非常に上手にできているが、「はじめに」の部分に市民の気概だとかを入れておいてもらえるといい。大変なことだと思うが、それぐらいの気構えでやれば、伝統産業はもっと良くなると思う。あまり客観的なものよりも挑戦的なほうがいい。

< 副会長 >

・出荷額1%増加という数値目標は非常に高い目標であり、業界も気概を持っていただかないと達成が困難かと思う。審議会でも、計画期間の中間で、1%達成できる状況になっているか、しっかりチェックしないといけない。この計画に掲げる具体的な取組が、結局どれだけの効果があったのかなど全部評価しないことには1%達成に向かったの道筋がつかない。評価が継続的にできるような仕掛けが必要になる。委員それぞれが十分にウォッチングをして、「これではいけない、もうちょっとこういうふうにしななければいけない」というようなことが常に反映できることが必要だ。特にこれだけのハードルの高い目標を設定している場合、その実現は計画を作った方にかなり責任が問われると思うので、私自身はしっかりと気を引き締めて、やっていきたいと思う。

< 会長 >

・計画答申案の作成にいろいろとご苦心いただいた皆さんありがとうございました。この後、これからが出発点みたいなものだが、市長へ答申ということで日程の調整をさせていただきたい。それまでに本日の御意見も含めて、正副会長に御一任をお願いしたい。

(委員了承)

6 部会の設置

(事務局から説明)

伝統産業活性化推進計画に掲げる取組のうち、審査選考を必要とする事項についての調査・審議を行う審査選考部会を設置する。

会長から各部会の設置、部会長（柿野委員）及び委員の指名がなされた。

(委員了承)

7 閉会